

救急看護論

単位数（時間数）：1 単位（15 時間） 必修/選択：選択 履修年次：4 年次 開講時期：後期

科目責任者（職位・氏名）：教授・土田幸子

科目担当者（職位・氏名）：助教・山田英子

対応DP：人間力 ケア・スピリット 人間の実践的理解 専門的知識・技術とその臨床実践
多職種連携・チームワーク アドボカシー

科目記号：102

■ 授業概要

救急医療を必要とする患者の身体的・心理的・社会的特徴をとらえ、救急患者と家族に適切な看護を提供するために必要な救急医療の概要、救急患者の病態、必要な処置・治療に関する知識を教授する。また、臨床現場で遭遇する急変時場面を、事例を通して発生要因を探り、アセスメントの視点と看護について教授する。

■ 到達目標

1. 救急看護を必要とする患者の身体的・心理的・社会的特徴を説明できる。
2. 救急看護を必要とする患者の家族の身体的・心理的・社会的特徴を説明できる。
3. 救急患者と家族の状況を判断し、適切な看護を考えられる。
4. 臨床で遭遇する急変時のアセスメントとその対応について説明できる。

■ キーワード

救急医療 救急看護 トリアージ 急変時のアセスメント・対応

■ 授業計画（授業項目、授業内容・授業方法、担当教員）

回	授業項目	授業内容・授業方法	担当
1	救急看護の概念	1. 救急看護とは 2. 救急医療体制と救急看護の場 3. 救急看護と法的・倫理的側面 【講義】	土田
2	救急看護の対象の理解	1. 救急患者の身体的・心理的・社会的特徴 2. 救急患者家族の身体的・心理的・社会的特徴 【講義】	土田
3	救急看護の展開	1. 初期・第二次救急医療における対応 2. 第三次救急医療における対応 3. 院内急変時における対応 【講義】	ゲスト スピー カー
4	救急患者の病態の理解 心原性ショックを中心に	1. 救急患者の主な病態 心タンポナーデ、LOS 2. 救急時に必要な処置・治療に関する知識 3. モニタリングの実際 【講義】	土田
5	急変を見抜け 急変時患者のアセスメント	紙上事例についてグループワーク ①不穏状態の続く患者 ②腹腔鏡手術の術後の患者 ③留置カテーテル交換後の患者 ④酸素飽和度の急激な低下の患者 ⑤ベッドからの転落の患者	土田
6	学習成果の発表	⑥人工股関節置換術後の患者 ⑦中心静脈栄養施行中の患者 ⑧夜間転倒後の患者 ①～⑧について実演を交えて実施 (全体討議)	
7	緊急時の基本処置と看護	1. 末梢血管と中心静脈路の確保 2. 動脈穿刺 3. 胸腔ドレナージ 4. 胃洗浄	共同
8		5. SBAR について 【演習】	

*履修者の人数によっては授業内容の変更もある。

■ 履修条件

病態生理学、急性期看護技術論を復習して臨むこと。

■ 成績評価方法

期末試験 70%、グループワーク 30%を総合的に評価する。

■ 課題（試験やレポート等）に対するフィードバック方法

- ・希望者に対して、試験のフィードバックを行う。
希望者は、試験、事前にアポイントをとったうえで、科目責任者の研究室を訪ねること。

■ 教科書

指定なし

■ 参考書・参考資料等

- ・山勢博彰編（2005）『救急看護論－成人看護学』ヌーヴェルヒロカワ
 - ・山勢博彰他著（2024）『系統看護学講座－別巻 救急看護学 第6版』医学書院
- 必要時、提示する。

■ 準備学修に必要な時間及び具体的な学修内容

- ・授業前：教科書の該当部分を読み、内容をノートに要約すること。特に専門用語については理解できるように工夫する。（90分）
- ・授業後：ノート整理を行い内容が理解できているかどうかを確認する（90分）

■ 担当教員からのメッセージ

救急医療及び看護の実際は拡大しています。生命の危機的状況に看護がどのようにかかわるのかを考え、臨床現場でみられる状況を想定し、これまでの知識を総動員して実際の場に役立つ看護を学習していきたいと思えます。

■ 研究室、連絡先、オフィスアワー

土田：研究室 11、tsuchida★iwate-uhms.ac.jp、事前にメール等で連絡を入れてください。

(※メールの際は★を@にしてください)

■ 担当教員の実務経験の有無

有

■ 担当教員の実務経験

看護師

■ 教員以外で指導に関わる実務経験者の有無

無

■ 教員以外で指導に関わる実務経験者

■ 実務経験を活かした教育内容

臨床での看護師の経験を専門的な知識をもとに意味づけし、学生の理解が深められるように実践的な講義を目指し実施しています。